

# 「日本語を教えるための日本語文法」

## 第5回

### 「～～かもしれない」

山田 あき子

<http://yu-yu-jin.com/>  
[nihongo@yu-yu-jin.com](mailto:nihongo@yu-yu-jin.com)

検討したいこと 「かもしれない」の用法を「可能性」「不確実性」でわからせられるか  
提案したいこと 「かもしれない」の中心の意味は「わからない」であること

今回は「～～かもしれない」を取り上げます。

かもしれないは非断定・非断言の表現方法の一つです。

非母語指導では、まず断定・断言の表現方法から指導をはじめるのが一般的です。

「あの方は山田さんです」「今日、図書館で宿題をします」「あしたは暑いです」のようにです。徐々に「あの方は山田さんでしょう」「今日、図書館で宿題をしたいと思います」「あしたは暑いかもしれません」などと非断定・非断言の表現方法を指導していきます。

初級の教科書には以下のように多様な非断定・非断言の表現方法が取り上げられています。

＜と思う・だろうと思う・かもしれない・だろう・はずだ・ようだ・そうだ（様態）＞

いずれも【【文<sub>1</sub>】非断定表現・非断言表現】文<sub>0</sub>のように文末に用いられ、【文<sub>1</sub>】で伝えるコト＝内容の実現が確実ではないこと、あるいは、絶対ではないことを伝えます。言い直しになりますが、断定できない、あるいは、断言できないことを伝えます。構文上の使い方に共通性がありますが、上掲の非断定・非断言の表現方法の一つ一つに撰択規則があることは言うまでもありません。今回はこの中の「かもしれない」に焦点を当ててみようと思います。

## 1 先行研究

「かもしれない」は先行研究では以下のように説明されています。

寺村 (p235 1984)、松岡他 (p125 2001)、森山他 (p29 2001) 新文化 (p130 2006)	可能性があることを伝える
『みんなの日本語Ⅱ』(p76 2008)	「でしょう」と比べより判断の根拠が薄く不確実な推量
『みんなの日本語Ⅱ』(p48 2014)	there is a possibility , however small, of～～
原沢 (p100、2017)	他の非断定・非断言との対照し分類 と思う(非断定)、かもしれない(可能性)、 はずだ(確信)、らしい(推量)
広辞苑(1998)	その可能性はあるが、確かではない
国語大辞典(1989)	話し手の不確実な判断を表す。断言はできないが、可能性、恐れなどがありそうだという場合に用いる。
大辞林(1989)	可能性はあるが、不確実である意を表す

文法解説書、教科書のマニュアル、辞書での説明から、「かもしれない」の用法に関し、共通に説明されていることは「可能性」と「不確実性」だと言っていいでしょう。別の言い方をすれば、この「可能性」と「不確実性」が撰択規則だと言えます。

さらに同義の視点での説明もあります。

森山他 (p 30、2001) ではほぼ同じ意味を表す表現に「可能性がある」「恐れがある」「しかねない」があることが指摘されています。

上記の先行研究を踏まえた上での問題提起は以下の点です。

果たしてこのような「可能性」と「不確実性」といった言葉で表現方法「かもしれない」の用法を日本語学習者にわからせられるのか。

## 2 結論

結論から言えば、「かもしれない」は【文<sub>1</sub>】で伝えられるコト＝内容が実現するかどうかかわからないということを伝える。すなわち、中心の意味は「わからない」だが、そう断言はできないことを伝たいときに用いられる。

断言をすると失礼になる、断言をする自信がないなど断言を躊躇する状況がある場合に選ばれる。

例を見ていきましょう。

天気予報や医者が発言が以下のようなものだったらどうでしょうか。

### 天気予報<sub>1</sub>

例 1 a 25日は西日本や東日本の多くの所でことしいちばんの暑さになるかもしれません。

沖縄は夏空です。奄美は局地的な雷雨にご注意ください。

九州から関東は晴れて、最高気温は32度前後かもしれません。

35度くらいまで上がる所もあるかもしれません。

新潟と東北は朝は一部で雨ですが、日中は晴れて、東北南部は真夏の暑さでかもしれません。

北海道は日ざしは控えめで、最高気温は17度前後とひんやりするかもしれません。

### 医療

例 2 a 医者：この薬をしばらく使ってみましょう。痛みが改善されるかもしれませんから。

いずれも、いい加減なことを言わないでほしいと思いませんか。無責任な。それでどうなるのだという疑義を持ちます。

上の例 1 a 天気予報と例 2 a 医者の発言の「かもしれません」を「でしょう」に入れ替えてみましょう。

### 天気予報

例 1 b 25日は西日本や東日本の多くの所でことしいちばんの暑さになるでしょう。

沖縄は夏空です。奄美は局地的な雷雨にご注意ください。

九州から関東は晴れて、最高気温は32度前後でしょう。

35度くらいまで上がる所もあるでしょう。

新潟と東北は朝は一部で雨ですが、日中は晴れて、東北南部は真夏の暑さでしょう。  
北海道は日ざしは控えめで、最高気温は17度前後とひんやりするでしょう。

## 医療

例2 b 医者：この薬をしばらく使ってみましょう。痛みが改善されるでしょうから。

天気予報は、この程度の非断定・非断言で受け手は納得するのではないのでしょうか。断定・断言はできないが、【文<sub>1</sub>】の実現性の度合いについて伝わってきます。自然現象でもありこの程度の内容で受け手は納得をします。例1のオリジナルは「でしょう」が使われている文が3文、そうです（様態）が使われている文が2文で書かれています。

一方、医者の発言としては、「かもしれない」よりは「でしょう」のほうがよいでしょうが、受け入れがたいものはありませんか。薬にもすがりたい患者にとっての救いになるとはどうい思えません。医者の発言には絶対に近い内容を患者としては求めたいものです。

西村京太郎の小説『羽越本線 北の追跡者』を見ると、被疑者の特定すらできず、あの人か。この人かと名前を挙げたりしているところ、動機・情況・事件の背景などを推測し議論しているところでは「かもしれない」が多用されています。容疑者が特定され、動機や情況がはっきりくると「かもしれない」は現れてきません。

例3 「～～略～～同一犯人だと思うかね」

「そこまでは、わかりません。犯人かもしれませんし、共犯者かもしれません」（西村 p 79）

例4 「尋ねてきたのは、山崎さんだったかも知れませんが、違うかも知れません。——私が覚えているのは、背が高く、若い男性だったということだけなんです」（西村 p211）

例5 「～～略～～残念ながら、事実として、被疑者は、斉田教授の、教え子ではなかったんだ」「それも、分かっているんです。しかし、教え子というのは、ただ単に、教授が勤めている、大学の学生だけということは、ないんじゃないですか？もっと広い意味で、教え子という意味が、使われているのかも知れません」（西村 p89）

例6 「なぜ、館長は、そのことを、我々に、いわなかったんだろうか？」

「そのこと自体が、今回の殺人事件の動機と、関係しているのかも知れませんが」（西村 p 96）

例7 「ひょっとすると 鶴岡の人間かも知れないな」（西村 p 91）

例3、4は【【文<sub>1</sub>】かもしれない】文<sub>0a</sub>し、【【文<sub>2</sub>】かもしれない】文<sub>0b</sub>】文<sub>0</sub>のように「かもしれない」が繰り返されています。これはどちらかに決められないことを伝えています。【【文<sub>1</sub>】かもしれない】文<sub>0</sub>の場合にも【【文<sub>2</sub>】かもしれない】文<sub>0</sub>を内包しているといつていいでしょう。

このようにみえてくると、「かもしれない」の選択規則はどちらとも決められない。端的に言ってしまうと、【文<sub>1</sub>】の実現性について冒頭で述べたようにわからないと伝えたいのだが、断定・断言には躊躇があることを伝えたいときに用いられると書いていいでしょう。

### 3 指導

断定できない・断言できないが、本当のところはわからないと伝えたいことにどんなことがあるでしょうか。

注1 全国の天気概況 <https://www3.nhk.or.jp/weather/> 2018/6/24 23:25

注2 西村京太郎 『羽越本線 北の追跡者』新潮文庫 2013

参考文献

寺村秀夫 『日本語のシンタクスと意味 II』 くろしお出版 1984

原沢伊都夫 『考えて、解いて、学ぶ日本語教育の文法』 スリーエーネットワーク 2017

松岡弘監修 庵 功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 『日本語文法ハンドブック』  
スリーエーネットワーク 2001

森山卓郎・安達太郎 『日本語文法 セルフ・マスターシリーズ6 文の述べ方』 くろしお出版 2001

『新文化初級日本語 I 教師用指導手引書』文化外国語専門学校 凡人社 2006

『みんなの日本語初級 II 教え方の手引き』スリーエーネットワーク 2008

『みんなの日本語初級 II 翻訳・文法解説 英語版』スリーエーネットワーク 2014

『広辞苑』 岩波書店 1998

『国語大辞典』 小学館 1989

『大辞林』 三省堂 1989